

# 幼稚園と音場の話

林 健造

「音場」なんて耳慣れない言葉ですね。これは私の造語です。これが「砂場」とか「お砂場」と言えば、「あ、砂で遊ぶ所ね」とすぐおわかりいただけるでしょう。こっちは砂ではなく「音で遊ぶ所があるといいなあ」という発想です。

本誌の読者の多くの方は、ご存じでしょうが、私どもが敬愛しておりました倉橋惣三先生が園長るとき、お茶の水の幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）が現在の地に移転前、御茶ノ水駅の近くにあったころの話です。職員室のすぐそばの地面がいつも湿っていて、子どもたちがよくそこへ行っては、いわゆる泥んこ遊びに熱中しているので、泥んこや砂遊びの場所として、お砂場をつくりました。

夏には日蔭もつくってあげようと、藤棚をつくりました。当時、全国的な幼稚園の発表会などを毎年のようにやっていましたので、幼稚園にはお砂場をつくり藤棚をつくるものということが全国的に広がったのだと、昔、及川ふみ先生にお聞きしたことがあります。

私の「音場」発想のきっかけは、今から五十年ほど前になります。私はお茶の水女子大学附属小学校から、新設の十文字学園女子短期大学に転任になり、すぐ幼児教育の学科長を命ぜられました。坂元彦太郎先生が学長となり、同時に附属幼稚園長も兼ねられました。坂元先生は、お茶の水女子大学附属小学校の校長先生でしたし、倉橋先生の親友だったので、不思議なご縁ということになります。やがて坂元先生の

ご逝去、ついで私が十文字学園女子短期大学附属幼稚園長になり、幼児と毎日楽しく遊べることになりました。

子どもの実態に触れながら、生きる力のたくましさ  
に舌をまき、遊びを通しての素晴らしい発想力に驚か  
され、特に一人ひとりの個性的な活動は砂のおだんご  
やトンネル作り、ダンゴムシ遊びなど、毎日飽きるこ  
ともない姿に接し、子どもが大好きになりました。こ  
れらは、先生のほうから、きょうは土のおだんご三つ  
作りましょうという指導の下ではなく、まったく自発  
的な活動に熱中しているのです。子どもたちは絵を描  
くことも音楽も大好きなのですが、お帰りの時間の  
前など、「皆でお歌をうたきましょう」と先生がピアノ  
のふたを上にあげ、タンタンタンと鳴らし始めると  
大きな声でうたいます。歌がすむと、「では皆さんさ  
ようなら」と帰っていく。私はなぜ音楽の活動だけ  
が、先生の誘導で始まるのかなと、時どき疑問に思う  
ことがありました。

振り返って、私は自分の幼児のころを思い起して  
みました。仙台生まれの私が四〜五歳のころです。私の  
家の隣には、仙台名物の笹かまぼこ屋さんがあり、そ  
の店先で、かまぼこを作る様子を見ることができまし  
た。右手に持った長い串でまな板を「タンタンタッタ  
ラター」という感じでたたきながらリズム音をつけ  
て、二〜三回繰り返し、左手のかまぼこに串を刺しま  
す。私はそれを見ているのが好きでした。同時に五歳  
上の兄も、これがまた大好きで、小一時間も毎日のよ  
うに見に行っていました。自宅の夕飯のときは、兄が  
魚の皿などを、はしでタッタラターとたたき始めると  
私も負けずにたたきから、母をととう怒らせてしま  
うことがしばしばでした。

それから、友達二〜三人とジュースの空き缶を坂道  
で転がすこともよくしました。カンカラカンカラと、  
いい音がしました。こんな遊びなどもやりだしたらや  
められぬ楽しい遊びでした。

身近な「音」の楽しみを遊びながら偶然発見し、夢

中になることがよくありました。

最近、幼児をカラオケに連れていく家庭もあるらしいですが、こんな時代に、園でやっている音楽は、先生がピアノをたたかなければ始まらないのが不思議でした。自主、つまり自発の音遊びがなぜないのでしょうか。

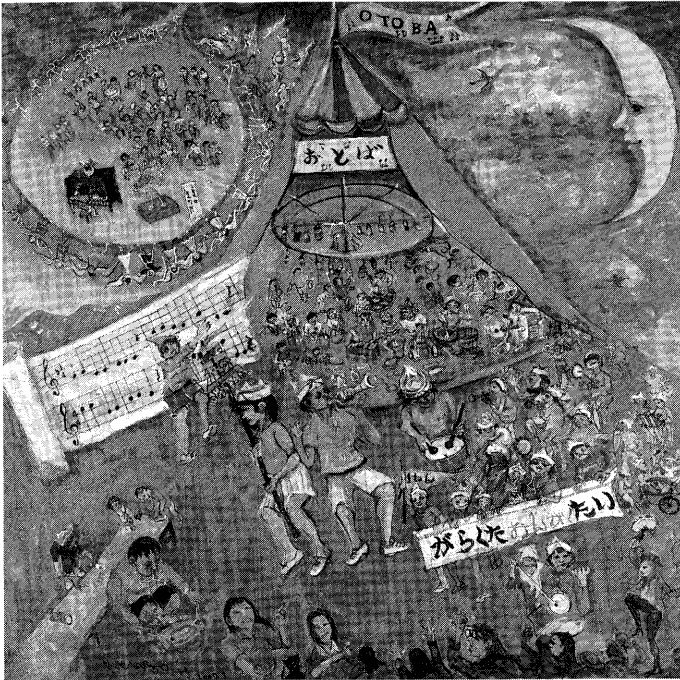
また、園庭の真ん中でマイク代わりに空き缶を持って、「二十一番、〇〇うたいまーす」なんていう楽しいことがあってもいいし、砂場があるんだから「音場」―音を出し合って皆で遊ぶ場所―があってもいいなあと、あるとき先生方に提案してみました。楽器を外に出すなんてと質問が出たりして、慌てて「いやあ、立派な楽器なんてとんでもない。空き缶とか段ボール箱とか、家で使わなくなった廃品で、いい音が出そうなものを持ち寄って遊ぶんです」などと話してみましたが長続きしません。

ほかの幼稚園で「音場」を始めたよという所を見学に行くと、青竹を輪切りにしたものや、小型のドラム

缶にペンキで楽しい模様を描いたものなどを使ったりして、子どもたちに大変人気がありました。演奏会みたいに先生も参加していて、時どきちよっと援助してやると、たちまちにぎやかなリズムにのって大喜びをしていました。

その後、テレビで妊婦がよい音楽を聞くことの影響が報じられたころ、私もこの「音場」を保育学会で発表しました。が、音楽家の先生の中には、「皿をたたく音は雑音で音楽ではありません」という論の方と、「いや大事な音楽の基礎です」という方と、討論になる騒ぎで、私のほうがびっくりしました。

今、画家として私が一番絵で訴えたいのは、「かのフリードリッヒ・フリーベルが一八四〇年に子どもの楽園としてつくられた幼稚園が危険にさらされ、幼児を守るサスマタなどの武具まで園で用意する時代に慨嘆。幼児にかつての楽園を返してあげたい」ということです。この思いを絵に描き、六本木の新国立美術館で開催された「水彩連盟展」に出品してみたのが、こ



音場・ガラクタ音楽隊



の写真の「音場・ガラクタ音楽隊」というテーマの百号の大作の絵でした。

「ガラクタ音楽隊」というのはもう五十年前も前、私が担任していた、お茶の水女子大学附属小学校の一年生のお話です。

この子どもたちが附属幼稚園から入学した年の秋の運動会でのことです。終わりのほうで、六年生の鼓笛隊がきれいなマーチにのって校庭をひと回りするので、赤い帽子をかぶったり楽器を鳴らしての行進がとても格好よく見えたのでしょう。運動会が終わって二三日たったある日、よそのクラスの先生が、「林先生、きつと先生のクラスの子たちですよ、何だか変なことをして校庭を回ってますよ。早く出て見てください」と呼びに来ました。「えっ？」と私がびっくりして飛び出したら、あの音楽行進をまねて、十五分ほどでドンチャカドンチャカ、なべのふたや段ボールの菓子の空箱などをたたいたりしています。曲はいつの間にか覚えたのか拍子をとっています。いろいろな飾り

を自分たちで作ったり、見つけたりしたのでしょう。ほかの先生方もおもしろい一年生だなあと笑って見てくれましたから、ほっとしましたし、子どもってやるもんだな！と思ったものです。

その後、校長の坂元先生がNHKの取材の方にお知らせしたらしく、その翌日取材にいられて、「ガラクタ音楽隊だねえ」と名づけられた思い出を絵の下の方に加えて描いています。が、「音場」のかかわりの姿として紹介してみました。

私は、九十歳の今でも音楽が大好きです。「音場」構想も、この音楽が好きという気持ちからの発想の一つです。子どもの絵の教育については、自分の描きたいことを自分の方法で描ける教育をやつと獲得したのが、つい最近です。音楽のほうも、最近の世界的な遊びの大衆化は、ラップなどをも含め幅広い活動が見られますから、きつと子どもの「音場」も真剣に考えられる時代になったのではないのでしょうか。

(十文字女子短期大学名誉教授)